

発生的認識論と《外界存在の知識の起源》

渡 辺 恒 夫

(人文学部心理学研究室)

Genetic Epistemology and "the Origine of our Knowledge of the External World"

Tsuneo WATANABE

(Laboratory of Psychology, Faculty of Humanities)

目 次

- まえがき — 他我問題と外界問題
- 序章 ヒュームからピアジェへ
- I 章 外界の認識は何によってなされるか：解決への予備的な見通し
- II 章 物の認識と物の探索はどちらが先か
- III 章 知覚 — 意味作用
- IV 章 行為、知能、認識
- V 章 概念は感覚運動的図式から連続的に発達する
 - A. 操作と群性体
 - B. 感覚運動的知能の限界
 - C. 心像の起源
- VI 章 表象的思考から操作的思考へ：《他人の観点》という残された問題
- VII 章 結論 — 内観を超える、外界存在の知識の起源
 - A. 下部論理
 - B. 外界存在の知識の《起源》と《根拠づけ》
- 補論 外界存在の知識の起源から、他我存在の知識の起源へ
- 参考文献

ま え が き — 他我問題と外界問題

18年も前の卒論を、稚拙な表現、混乱した筆の運びに手を加えた以外、ほぼ内容をそのままに活字化するに当たって、哲学専攻の学生だったその当時の、問題意識をまず説明しておかねばなるまい。かねてからの課題だった他我問題で、初めての論文らしきものを書き懸賞に応募してからのち*、私は目をいわゆる外界問題に向け、他我問題により本格的に取り組むための、予備的作業、ないし障害物、として意識するにいたったのだった。

* 「他人の存在をめぐる論争」「理想」1967年11月号（渡辺恒人名義）。

他我問題とくらべれば、外界問題というものに、私はそれまで真の問題性を覚えたことがなかった。他我問題と外界問題とは全く性格の違う問題ではないかという直感があったと言えよう。ところが哲学史に親しみ始めて驚いたことに、哲学者にとっては外界問題の方が真の問題らしく、他我

問題は、その一部としての従属的な扱いしか受けていないことを発見したのだった。

他我問題がようやく真に困難なアポリアとしての姿をあらわすのは、現代哲学においてであるといえよう(もしフッサールとヴィトゲンシュタインの登場をもって、現代哲学の開幕とみなすことが許されるならば、それは、心理学においても、テオドール・リップスの徹底的な批判によって、いわば常識的他者認識説としての類推説にとどめが刺された時期に当たっている)。けれど、他我問題を中心的テーマとする現代の哲学者の中にも、外界問題の一部として理解されていた時代の影響は影を落としているかにみえる。

「知覚の比喩と他我の比喩とは平行する。知覚の比喩は、現にわたしの居る視点とは別な視点からの知覚の想像という虚構であった。一方、他我の比喩は、現にわたしがわたしでありながらまた他人の境涯にわたしがいるという虚構の想像である。両者において共に、いわばわたしの遍在という虚構がみられるのである。この虚構によって、知覚の場では、無数の側面を持つ(三次元)物体の認識がなり立っている。他我の場では、この虚構によって、人間および人間の心の認識がなり立っている」(大森荘蔵『物と心』209頁)。

「虚想抜きでは家具は家具ではなく、食べ物食は食べ物でなく、花は花でなく、人は人でないのである。背面や側面の虚想の立ち現れがこもらずしては机の知覚正面が机の正面ではないのと同様、人の心(悲喜、気分、意図、知覚等)の虚想がこもらずしては他人の身体は『人の身』ではないのである…(後略)」(同書228頁)。

このような説にどこか不満足感を覚えるのは、なるほど他我の認識は「虚構の想像」であり「虚想」であっても、机の背面はそうではない、と感じるからである。なぜなら、物の背面の存在を確かめたければびっくりかえせばいい。これに対し、他人の心に関しては、それと平行ないかなる
《操作》もあり得ないではないか。

むしろ、「物の背面の存在を確かめたければびっくりかえせばいい」といった反論は、いささかも、大森を、さらにはその背景をなすパークレイやヒュームを動揺させはしない。びっくりかえされて知覚された背面はすでに「背面」ではなく「知覚正面」なのだから。——けれども、ここには、認識というものへのある根本的な誤解が潜んでいるように思われる。私が以下の論文でまず明らかにしようとして企てたのは、この誤解である。それを、受動的観想的な知識観と呼ぶことができよう。これに対し、「びっくりかえせばいい」と私が考えたのは無意識裡に、ある、別の立場に立つ知識観に身をおいていたからだ、といえよう。そうして、自らが無意識裡によって立っていた知識観を意識化するものとして、ここではピアジェの発生的認識論を選んだのだった。これを、能動的行為的知識観と称せよう。

けれども、この論文の元来の目的はそこにはとどまらない。もともと、外界問題を解決するためのものとしての知識観をいくら練り上げたとしても、他我問題には手も足も出ないということを示すこと。すなわち両者はまったく異質の問題であることを明らかにすることこそが、外界の問題に取り組んだ目的だったのだ。他人をびっくりかえしても、背中が見えるだけで、心は見えないのである。それどころか、他我にたいし、能動的行為的知識観を適用することは、必然的に、他者を《他物》化することになるのである。

卒論の段階では他我問題との関係については論じる余裕がなかったため、補論を追加してこれにあてた。また、卒論には多量の註がついていたが、一部のみを残して「旧註」の印をつけ、新たな註である「*」と区別した。ピアジェ心理学そのものにあまり関心のない読者は、旧註の方とはばしても構わない。さらに、てっとり早く本稿の論旨を知りたい方は、序章とI章のあと、結論であるVII章Bへ跳んでみるのもよいだろう。

なお、本稿は、「他我問題シリーズ」の一環をなすものであるが、このシリーズでは前掲の『他人の存在をめぐる論争』の他、「独我論と転生観」（勁草書房近刊『クロス・ジェンダーの文化』所収）をも参照されたい。

序 章——ヒュームからピアジェへ

意識から出発し、内観を方法とする近世哲学にとって、外界存在の問題は最大の難問のひとつただだろう。イギリス経験論は、外界の存在を《証明》するという大上段の構えを避け、《外界存在の知識の起源》をさぐるという、斜のかまえを取ってこれに対処するにいたったのだった。

なぜなら、「外界はほんとうに存在するのか」「それはいかにして根拠づけ（justification）されるのか」といった哲学的反省、批判があらわれるより前に、それどころか物心つくや既に、私たちは、外界存在を、自明のものとして受け入れてしまっている自分を見出すのだ。かくも強固で普遍的な信念である以上、この信念がいかにして形成されたかという知識の発生的説明を、知識の哲学的批判に先行させるべきではないだろうか。

経験論からする議論の典型はヒュームによって与えられる。彼にとっては、たとえばこの灰皿の存在の認識とは、意識という劇場にその直接知覚が登場していることと同義であった。直接知覚されていない灰皿の部分——裏側や底——もまた存在するという、つまり、灰皿が、感覚印象の単なる集合ではなく《物体》として存在するという信念は、それゆえ、裏や底の心像が、直接知覚の代役として、それも十分な鮮明さと規則性をもって登場することによって説明される。表面の直接知覚がたちどころに裏や底の心像を呼び起こすにいたるメカニズムの説明が、のちに連合主義心理学者によって、連合原理（Principle of Association）として定式化されたところのものだ。

じっさい、彼のこの議論は、哲学の母胎から経験的心理学がいかにして生まれるかの原型的な姿をも私たちに示してくれる。ヒュームは、彼の知識論の全体系を、そのつど道具として必要となる心理学を——おそらくは他の科学をも——自らつくり出しつつ建設して行ったと言えよう。

ところが問題は、2世紀まえの哲学に値打ちがあるようには、2世紀前の心理学に値打ちはないことだ。19世紀の末から今世紀始めにかけて現れ、現代心理学の基調を決した行動主義心理学、ゲシュタルト心理学、精神分析のどれを取っても、連合主義心理学の否定でないものはない。行動主義において語られる連合とは、感覚や心像の連合ではなく刺激と反応の連合だし、そもそも連合主義心理学の方法であった安楽椅子の心理学（内観法）そのものが、科学の客観性にふさわしくないとして否定される。ゲシュタルト心理学は、初期には実験現象学とその方法を称されたように、内観の意義を否定はしないが、個々の感覚印象やら心像やらが連合して《灰皿存在》なる「複合観念」を形成すると言った、原子論的仮定を否定する。灰皿の《裏》や《底》は、「ゲシュタルト」としてすでに直接与えられているというわけだ。最後に精神分析は、意識過程における因果的連鎖の完結性を否定し、意識に生じる事象はたえず無意識的なものによって説明されねばならないとした。

そこでヒュームからは、「何が私たちに物体の存在を信じさせるのか」（A Treatise of Human Nature, p187）という基本的な問題設定を、またそのために当時の最新兵器として自らも開発にあたった連合主義心理学を駆使した、というアプローチの仕方を学ぶのが、その知識論の学説内容を研究するよりも、歴史家ならぬ私たちににとってはより哲学的、ということになるろう。さいわい兵器庫をなすべき現代心理学の中には、このようなアプローチ法にとって有効と思われる、スイスの心理学者ピアジェによる発生的認識論（épistémologie génétique）というものがある。ピアジェにおいて外界認識という問題がいかに追求されているかをまず検討し、しかる後、伝統的哲学的な外界存在の問題にたいし、それがいかなる意味と関係とをもつかを考えてみよう。

I章 外界の認識は何によってなされるか：解決への予備的な見直し

私たちの当面の問いは、何が私に外界の存在を信じさせるのか、というのであった。この問題は、「私が外界の存在を信じたとき、何が私に生じているのか」とも言い換えられよう。

では、外界ならぬ直接知覚の存在を信じたときには、何が私に生じるのだろうか。経験論の哲学にとっては、そこには深刻な問題はない。一般に経験論の哲学は、直接知覚を第一次的に確実なものとし、これにセンス・データといった、知識の最も基礎的単位としての権能をあたえる。その前提となっているのが、「あるものの存在を信じるとは、そのものが十分な鮮やかさと規則性をもって意識に現前する以外のなにもでもない」という、受動的観想的な知識観だろう。したがって外界の存在の信念もまた、《裏》や《底》の心像が、直接知覚に準じるほどの鮮明さと規則性をもって現前すること、として説明される外はなくなるわけだ（ゆえに、外界は、確実性において直接知覚に、量的にのみ劣る。）

それだけではない。この知識観は、思考、判断といった知的活動の総てを、さらには意志や感情、ヒュームにいたっては自己意識をさえもさまざまな感覚印象と心像の離合集散の「紙芝居」に還元する（離合集散の法則を提供するものが連合主義心理学だ）。したがって、ここでは《行動》の認識論的意味、などということは問題にはならない。まず認識してから行動するのであり、認識は行動を必要としないものなのだ。

このような受動的観想的にして原子論的還元主義的な知識観を、内観という方法自体は受け継ぎながらも打破していったのが、今世紀はじめの、ヴェルツブルク学派を中心とする一連の思考研究だったといわれる。すなわち、無心像思考なるものが存在し、思考においては心像の役割はむしろ副次的であること、思考過程で運動感覚が重要な役割を担っているらしいことなどが、これらの研究によって発見されたのだった。けれど、それ以前にベルクソンが、哲学の側から、再認や一般観念といった問題について、いっそう大胆な仮説を提起していることを見逃してはならない。

再認 (recognition) の現象について連合主義心理学のなした説明は、現在の知覚に連合しての過去の知覚の想起 (心像としての再出現) ということにある。これに反対してベルクソンは、まず、知覚は心像へと続くのではなく、むしろ運動の喚起へと直結すると説く。それゆえ再認とは、対象に対してかつて喚起された運動の、微小な再現なのだ。むしろ、この運動的再認は、想起作用の中ではいわば低次の活動に属し、心像の喚起による想起である「回想 souvenir」がより高次の想起活動としてある訳だが、ともあれ、「再認は、思考される前に、まず演じられるのである。」 (Matière et mémoire, p.103)

さらにベルクソンは、一般観念の起源についても、通常なされる説明は、精神の抽象作用といった同語反復の説明であるか、さもなければヒュームのように全く個別的な心像の習慣的連合に還元するかであったのに対し、抽象作用の根拠をこれまた身体運動に求めた。感覚刺激が連続的に変化するのに比べ、それに反応する運動的適応の変化は不連続である。これが《類以》というものの抽象の出発点である。ふたたびベルクソン独特の表現を引用するならば、「一般観念は、かくして、表象される前に体験されるのだ。」 (ibid., p.178)

ピアジェの発生的認識論も、むしろのことこのような発想法の流れの中にある。それゆえ、私たちとしても、ヒューム的な知識観からの発想の転換を図りつつ、外界認識が何によってなされるかの見直しとしてあらかじめ押さえておくべき点が幾つかあるだろう。

たとえば、視野の外で目覚まし時計が鳴り出してまもなく止んだ、という状況を考えてみよう。私はそこで、時計という物体が、直接いま知覚されていないとしても、現に存在しているという信念をもつ。が、ここで注意すべきは、単に信じるというだけでなく、振り向いたり、手を伸ばして時計に

触れようとしたりすることもあることだ。成人の意識にとって、このような《探索行動》は、認識と信念の結果であると思われる。が、上記のベルクソン流の発想法を取るならば、発生的にみれば最初に探索行動があったのであり、認識や信念はその関数として形成されるものだ、ということになる。

ゆえに、また、探索行動には、幼児の、認識を先導する無意識的探索と、成人の、認識に追随するだけの意識的探索とを区別せねばならないということにもなる。

ピアジェをはじめとする発達心理学者たちの研究は、以上の諸点を実証してくれるだろうか。

さらに、物体の探索が、その認識に発生的に先行していたにせよそうでないにせよ、私たち成人の現在の物体認識を、いかなる過程として理解するべきであろうか。ヴェルツブルク学派の明らかにしたように、成人の思考過程を心像の離合集散に還元できないのであれば、心像や知覚といった具体的な過程とは別個の、独自の機構、独自の発達原理を備えたシステムと見なければならない。このシステムを知能のシステムと名付けるならば、(この場合、《思考》は、知能的活動の高次の発達段階を示す語となる、)それを、行動、知覚、心像という3領域との関係において解明する必要がある。

その際、この関係の仕方が、知能システムの発達にしたがって変化する、ということも考えられよう。たとえば、初期には運動的行動や知覚との関係が密であったのに、しだいに心像の役割が増大し、さらには無心像思考の段階にいたる、ということも予想できるわけであり、外界の認識もまた、知能システム一般の発達段階に応じて性格を変えるものなのかもしれない。そこで、ここにピアジェの発達心理学における、知能の一般の発達段階説を表示しておくことは、今後の叙述のために便宜となるかもしれない(ピアジェの発達段階区分法は著作の執筆年代によって多少の変動があるが、ここでは『知能の心理学』にしたがった。)

時 期	年齢
感覚運動的知能の時期	0～2歳
第1段階 反射の練習	0～1月
第2段階 最初の適応的行動の獲得と一次循環反応	2～4月
第3段階 2次循環反応と興味ある光景を続かせようとする手続き	5～8月
第4段階 2次のシュマの強調と、その新しい状況への適用	9～12月
第5段階 3次循環反応と、能動的実験による新しい手段の発見	12～18月
第6段階 心的な組み合わせによる新しい手段の発見	18～24月
象徴的思考の時期	2～4歳
直感的思考の時期	4～7-8歳
具体的操作期	7-8～11-12歳
形式的操作期	12～14歳で完成

II章 ものの存在の認識と、ものの探索はどちらが先か

まず、第一の点を検討しなければならない。ピアジェも、生後一ヶ月間を、反射の練習の段階と名づけているように、行動はまず反射として始まる。このような段階の行動に、何らかの《理解》もしくは《認識作用》が伴うとは見なせないし、見なす必要もないことは、まず認められよう。ところが一方、反射のうちには、出現と同時に方向づけをしめす一群があり、探索行為らしきものが、すでにこの段階で始まっていることが示されるのだ。

たとえば、聴覚刺激をあたえると音源の方向を向くという、様相を異にする感覚の間の空間的協調を必要とする探索行為の発達を例に取ってみよう。ピアジェの先輩格に当たるフランスの心理学者ワロンの記述によれば、音響刺激に対し、生後3～4週間に、目が、つづいて頭が、音のほうに向いて音源を探るかのように動きはじめる。むろんこの種の方向的《定位反射》は、聴覚に限られるものではなく、触覚によるものであれ、臭いを刺激とした場合であれ、反射は刺激の源の方に向くよう生じる。方向づけはこの種の反射に後から付け加わったものではなく、内在していたものであるという(旧註)。

旧註 音響刺激のひきおこす最初の反射は、方向的なものではなく、もっと未分化な反射なのだワロンはいう。それは、姿勢を保つ筋肉すなわち、緊張性のはたらきをする胴体の筋肉をも、四肢の筋肉に加えて作動させる、全身的原始的な緊張反射である。2、3ヶ月以内にこの種の反射は減少し始めるが、それは、方向的定位的反射が重要さを増してきたことを示しているという(久保田正人訳、『児童における性格の起源』50～52頁)。

ところがその後、出生後10分以内の新生児にも、方向的反射のあることを示す実験が、1961年ウェルトハイマーによって行われた。テストは、正常状態で生まれた一名の幼児にたいして、出生後3分の後に開始された。仰向けになった被検児の左右の耳で音を聞かせ、眼球運動を観察した所、52試行中45試行に眼球運動が認められた。うち、18試行に、正しく音源方向への運動が観察され、4試行では、逆方向への運動がみとめられたという。(W. Epstein: Experimental investigations of the genesis of visual space perception. *Psychol. Bul.*, 124, 1964, より引用)。

この定位的反射こそ、探索行動の機能的等価物であるといえよう。ところで、この探索行為というものを、「ある刺激を手掛かりとして他の刺激を得ようとする行動」と定義するならば、人間の随意的意図的行動の総てが、この範疇に入る、と言えるだろう。つまり、定位的反射とは、成人の意図的行動そのものの機能的等価物ともいえるものなのである。そもそも定位的反射とは、生理学的には「皮質性」として特徴づけられるのであり(Piaget: *La naissance de l'intelligence chez l'enfant*, p64. 以下 *naissance* と略記。), 乳児の反射は、皮質性のものと、より下位の中枢の支配を受ける反射とに大別されるのである。後者は知能の発達とは直接関係が無く、個体の成熟後も反射にとどまる。たとえば膝蓋反射、角膜反射、自律神経系の支配を受ける植物性反射(瞳孔反射、発汗反射、唾液反射、等)。

さて、皮質性反射から随意的意図的行動への発達とは、刺激-反応という反射行動を基盤として発達する、諸々の行為図式(chema)が、分化と相互協調によって一個の全体的システムを形成して行くことだと、ピアジェは考える。じっさい、幼児の諸活動が、出発点からしてシステム化をひきおこすのは驚異ですらある(*naissance*, p27)。他方、下位の反射がけっして随意的行動へと進化したくないのは、相互協調とシステム化には無縁な、それぞれが孤立した反応だからであるとも言えよう。

ここでいう行為図式(シエマ)とは、簡単に言えば、積極的にいつでも行為となって繰り返され得る、行動の下書きのことであり、生活体の活動の基礎単位であると同時に、ピアジェ心理学においては、心理構造の基礎単位としての重要な概念となっている。最も基本的な諸シエマは反射として始まるが、第一段階を通じ、くりかえし使用されることによってより適応的となってゆく。たとえば、唇に乳首をくわえさせることで起こる反応は《吸綴反射》だが、これが、唇の端に触れる感覚だけで乳首をくわえ、吸う、という、より適応的な行動に発展し、《唇への感覚-吸う運動》という感覚運動的図式として、心理生活の基本構造をなしてゆく。ちなみに探索行為へとシステム化されてゆく基盤として重要な方向づけ反射には、他に、手のひらへの刺激に反応する把握反射、視野を横切る対象を追跡視する追視反射、すでに述べた、音源への方向的反射などがある。

ここで、さきほど例にあげた、《音源を見る》という探索行為が行為図式としていかに発達する

かを、やや詳しくみてみよう。ピアジェはこの問題を、感覚運動期の第二段階（2～4ヶ月）の項で一括して扱っている（第一段階でのこのスキーマの観察はピアジェ自身には欠如しているのであるが、上述のワロン、ウェルトハイマーなどの観察によって補完できるだろう）。

ところで、反射として始まるスキーマが、分化と統合（相互協調）によって高次の行動へ発達してゆくための重要な条件は、経験である。つまり、すでに触れたように、スキーマは繰り返し使用されねばならない。この、スキーマを繰り返し使用するという幼児の動因は何だろう。常識的には、飢え、渇きなどの、《有機的欲求》という答えが返ってこようが、ピアジェのより重視するのは《機能的欲求》である。これは、いわば、目があるから見たい、足があるから走りたいという、行動機能に内在する欲求である。機能的欲求は、とりわけ、第二段階以下の諸段階を特徴づける、《循環反応》にとって重要である〔旧註〕。また、この欲求は、知的機能の発達にしたがって、認知的欲求とも呼ぶべきものになっていく。

旧註 たまたま下がっている紐をひっぱってガラガラを鳴らした乳児は、何度でもこの行為をくりかえす傾向がある。つまり、ある運動によって興味ある結果がもたらされるとその運動を再生するという、乳児に顕著な行動を、J. M. ボールドウインは循環反応と呼んだ。一次循環反応では、興味は、指をスパスパ吸うなど、自分の体に関したもので、運動そのものに向けられるが、二次循環反応（第3段階）以降は、行為の外的な結果に向けられるようになる。

第2段階では、スキーマはより柔軟に、適応的になり、「運動的習慣」とでも呼べる活動を形成してゆく。この段階の初期の探索行動をみると、音を聴いても音源を発見するまで探し続けようとせず、その方向を向くだけ、という例が多い。つまり、音と対応する視覚像への《予期》に導かれての探索とは言いがたいのである。

ここで、ある行動がある予期に伴われているか否か、何を指標として判断できるのか、という疑問が生じるかもしれない。もしも予期を発見すべき対象物の《心像》のあらかじめの現前、といった意識過程としてとらえるならば、幼児では不可能な内省報告によるほかなくなろう。が、予期どおりの対象を発見すれば満足や喜びの、できなければ失望の表情を浮かべるなど、外的指標によっても推測できよう。ピアジェは、最初の数カ月における微笑反応を再認一般の指標とみなし(naissance, p69)、探索行動の解釈に適用している。ふり向いて音源を見、微笑すれば、そこには予期があった、つまりそれは《初認》ならぬ《再認》であった、といえるわけだ。

観察48—…0歳1カ月26日くらい、ローランは、私の声を聴くや（たとえ私の姿が直前に視野になかった場合でも）正しい方向を向き、私の顔を——それが静止している場合でも——見て、満足そうな様子を見せた。
(naissance, p79)

以上のような指標で解釈するならば、この観察48は、予期を伴う探索行為が、すでに2カ月目から発達を始めることを示唆しているように見える。ところがピアジェの解釈は、予想以上に慎重であり、第二段階を通じて真に予期的探索に値するものはないとする。

いったいにピアジェの解釈は、一貫して、以下の三つの方向性をもって行われている。すなわち、第一に、《もの》——直接知覚から独立に存在し、異なる感覚様相を通じて同一のものとして現れる——の概念の生得性を否定することである。第二に、それゆえ、ものの概念にもとづく、たとえば予期的探索と思われる行動であっても、他の説明が可能であり、諸々の観察を総合してみればむしろ妥当であること。第三に、同じく生得性を否定する説であっても、観念の連合や条件づけのような、受動的な主体観に基づく説明の不適当さ。これらの方向性を同時に満たす解釈の原理が、同化(assimilation)と調節(accomodation)の原理なのである。

これは、生物学者として出発したピアジェが心理学に持ち込んだもので、生活体が外界の物質を摂取吸収して自己の体組織に適合的にこれを変化させる（つまり構造を押し付ける）のが、本来の意味の同化である。それに対して、心理学的な意味での同化とは、外的事物にたいしてシュマを適用すること、つまりシュマに取り込んでしまうことである。また、外的事物に適合的に、既成のシュマを変化させる（行動様式を変化させる）のが、心理生活上の調節である。（『知能の心理学』21頁以下。）

感覚運動期における同化活動は、3つの形で現れる。再生的同化は、シュマの活動を何度も反復させる活動であり（循環反応はこのはたらきである）、汎化的同化は、既存のシュマを新しい対象へ広げる活動、再認的同化は、のちに詳しく述べるが、場面の弁別の活動である。

第二段階の幼児が、音のする方向を見ようとするのは、聴覚像と対応する視覚像を《予期》するからではない。まして、音と、その源となる物体との因果の理解がある訳ではない。「目が対象を追視する運動と同様、音への調節によって赤ん坊は音源の方向へ頭を向ける。おのずと視線も同方向を向き、観察者は、赤ん坊が、聴いたものを見ようとしたという印象を受ける。たぶん、単に、聴くと同時に見ようとしたただけなのに」（naissance, p.82）。この調節の作用が、定位反射に基盤をもつことは言うまでもない。同化という側面と言えば、この時期の幼児は、手持ちのあらゆるシュマの中へと、新しい現実を同化しようとする。とりわけ第一段階の後期から見られるのが、興味ある光景に対して唇を突き出す、といった《吸う》シュマの活発な同化活動だ。「音を聴くや、何もない空間を吸うという行為がしばしば生じる」（naissance, p.81）。ではなぜ、第2段階になると、《吸う》ではなく《見る》シュマが正しく選ばれるようになるか。「ある場合には、成功が探索を促進する」（naissance, p.82）。吸うシュマは空振りに終わるが、見るシュマは、しばしば興味ある視覚像をもたらす。この点、人声は特権的な例となる。呼び掛けられた方向へ向くと、たいてい、動き、笑いかける人物像という、最も興味ある成果がもたらされるのである。そして、「幼児にとって（注視するのと吸うのと）二つのことを同時にするのはむづかしい」（naissance, p.81）。

このような、音への視覚的シュマの関係の成立は、ゾーンダイクの効果の法則によって説明されるような単なる連合ではない。ピアジェはこれを、視覚的シュマと聴覚的シュマの「相互同化」によって説明する。「幼児はある意味で、顔を聴こうとし、声を見ようとする」（naissance, p.82）。つまり、聴くシュマの構成要素である聴覚像を見るシュマが同化し、その結果えられた視覚像を、こんどは聴くシュマで同化しようとする、というようにして、異種感覚様相間にシュマの協調が成立する。この相互同化が、「物体や因果性を産出する、より複雑な実体化作用（solidification）に先んじて、視覚像と聴覚像の同一性確認（identification）を構成する」（naissance, p.82-83）。

0才3カ月1日目、私はローランが母の腕に抱かれているときに、身を伏せて、bzzという彼のお気に入りの音を発した。彼はまず左を、次に右を、それから前を、そして自分の下方を探し、そこで私の頭髪を認め、視線を下げて、動かずにいる私の姿を見た。最後に彼は笑った。この最後の観察は、まちがいなく人物の声と姿との同一性確認を示すものと見なされえよう。（観察48の後半）

第2段階の後半でかなり発達するこのような同一性認知は、それゆえ、いまだ《客観的同一性》でなく、《主観的同一性》の域にある。そもそもこの段階では、視覚的探索による対象の発見は、見ようとする行為の延長でしかないのである。幼児にとって、見る行為が対象を産出するのであり、いまだ、《発見》としては理解されていないと言ってよい……。発生的認識論の礎石をすえた3部作中、『知能の誕生 naissance』に続く、2番目の著作である『実在の構成 La construction du réel chez l'enfant』においてピアジェは、このような主張を、「ものの概念の発達」と名付けられ

た章のなかで、丹念な観察に基づき実証して見せる。*

* 3部作中第3の著作は、象徴機能の形成をあつかった《La formation du symbole chez l'enfant》である。

これまで述べてきたような、聴覚—視覚といった異なる感覚様相間にまたがる探索行為をひきあいに出すまでもなく、同一感覚内での探索行為らしきものも、非常に早くから出現する。たとえば、触運動感覚についていえば、哺乳中に乳首が外れるや否や唇で模索するような行動が、出生後2〜3日で観察される。このような探索は、まず反射的活動に、2カ月目に入るところには獲得的習慣に結び付いて発達するという (naissance, p14-15, obs. 1)。視覚については、1カ月以内に、ゆっくり動く対象を追視できるようになる。ここで興味深いのは、3カ月目に入ってから観察である。

観察2—視覚の領域では、ジャクリーヌ(2カ月27日目)は、母親を追視して、視野から消えたときには、再び現れるまでその同じ方向を見続けた。/ローラン(2カ月1日目)についての同じ観察。(後略) (naissance, p:15)

このような行為は、泣き叫んだり、足をバタつかせたりするのと同じ、そうすることによって欲する対象をふたたび《現出》させようという、魔術的行為なのである〔旧註〕。従って、ここでも対象は、自己の活動そのものの延長である。ものというものは、自分がそれを知覚したり行為の対象としたりしていない間にも存在を続けるという、「ものの客観的永続性 permanence d'objet」の理解はもちろんない。ただし、この段階でも、《期待》はある意味で——見たいという欲求と未分化な形で——存在している訳で、その限りで一種の「主観的—感情的永続性 permanence affective ou subjective」があるとは言えるのだが (naissance, p17)。

旧註 このような行動様式のもとにある心性を、ピアジェは、因果性理解の面から、「魔術的一現象主義的因果性」と名付ける。少なくとも8〜9か月の頃までは、この因果性の支配下にあると考えられる。たとえば、もともとが喜びの表現である、前身を弓なりに曲げる動作に、吊り下がったガラガラをゆらすといった興味をひく結果を2〜3回連合してやる。すると、何か興味ある光景を再現したい場合には、何でもこの動作をするようになる。1カ月に近い「消去」にもかかわらず、これが固執されたのは(ジャクリーヌ, obs. 132)、客観的因果性理解でも、オペラント条件づけでもない、魔術的一現象主義性因果性、つまり、自己の行為そのものが外的結果を産出する、という因果性理解が元にあると考えねばならない (naissance, p208-209)。

このように、発達初期を特徴づける幼児の外界認識の様態を、ピアジェは、行為に中心化されている、と言い、またこのような認識様態をもたらす心性を、自己中心性と名付けている。もっとも、中心に《自己》といったものがすでにある訳ではない。幼児にとっての唯一の实在の平面とは、自己も外界もない、行為とその延長としての諸々の感覚とでできており、この平面からしだいに、自己と外界とが分化して行くのであるが。

第三段階(5〜8か月)に入ると、幾つかの重要な進歩が見られる。視野を逃れた対象を視覚的探索によって再び見いだせるようになるし、手の平から逃れたものを、手探ることで再発見出来るようになる。ところが他方、この段階を通じて、これとは矛盾するような行動が観察される。——この時期にはすでに、《見る—つかむ》というジェマの強調が成立しており、幼児は目前のものを何でもつかもうとする。ところが、指先がふれようとする瞬間に対象を衝立で遮ってしまうと、とたんに、あたかもそれが世界から消滅したかのように、行動を中止してしまうのだ (La construction du réel chez l'enfant, p25-26. 以下 construction と略記)。

注意深く観察を続けてゆくならば、この矛盾は見掛けだけのものであることが分かる。手の平から逃れた物体を手探りで再発見できるといっても、それは、対象を徐々に取り去った場合であって、それが手の平から突然落ちた、という場合には、探索行動は起こらない。視覚についても同様で、

まだ視野の中に対象があるときに追跡していた軌跡の延長線上だけを視線で探るのであり、そこで見付からなければただちに行為は止んでしまう (construction, p26)。つまり、探索行動が起こるためには、対象が完全に消え去ってしまう以前に行動が起こされていることが必要なのである。それゆえこの段階での探索行為は、《もの》の概念に基づく真の能動的探索ではなく、対象への見るシエマ、つかむシエマの「調節」の延長なのだ。対象は依然として行為から独立した存在を賦与されていず、行為の延長の域にとどまっている……。

《もの》の概念が獲得され、隠された対象を、遮蔽物を取り除けて発見するという真の能動的探索が可能になるのは、ようやく第4段階(8~12か月)を通じてのことなのである。

幼児は、《もの》の概念を理解していないのではなく、単に自分の身体の用い方をまだ知らないのだ、という人がいるかもしれない。けれども、第3段階の幼児にとって、布切れや毛布を取り除くという行為自体は困難ではないのである (construction, p42)。さらに、覆い隠された対象が時計のように音を出すものであって、見えなくともなお幼児の関心を引き続ける場合でも、覆いを取り除こうとはせずに傍らの観察者の手を「あたかも時計がそこから湧いて出るかのように」(construction, p39, obs. 32) じっと見続ける、といった魔術的行為は、この段階での不完全な探索行動が、探索の失敗などではなくそれ自体完了した探索行為とみなすべきことを示唆している。

以上、まとめると次のようになろう。

まず、Iにおいて述べられた予備の見通しのうち第一の点については、外界の探索は外界の認識に先行する、という回答が得られたように思う。外界の探索はたいへん早くから、行動として、定位反射という形で始まり、《もの》の概念が未形成のうちに発達するのである。ここで直ちに、次の問題が提起されるだろう。外界探索行動と、外界認識との関係はどのようなものか。後者は前者から直接生み出されるのか。それとも、時間的には後から発達するにせよ認識には思考(もしくは知能)や知覚(および心像)がより深くかかわっていて、行動の方はいずれはそのようなものとしての認識の支配下に組み入れられてしまうのだろうか。

この点を発生的に解明することが、予備の見通しのうちの第二の点——成人の外界認識を、思考(知能)、知覚、行動とのかかわりにおいて究明すること——へと直結しよう。

まず外界認識における知覚(および心像)の役割の、発生論的考察から始めよう。

Ⅲ章 知覚と認識——意味作用

外界の認識はもっぱら知覚に属し、一次的には特別な思考や知的構成といったものを要しない。知覚は介在物なしに直接外界に到達する——これが私たちの素朴な実在論の立場であるが、哲学的反省によって伝統的に批判にさらされて来たのであった。これに対して現象学派は、私たちの《反省以前の了解》そのものを明るみに出すことを主張する。たとえばサルトルによれば、「私たちは、いつも、見る以上のものを知覚する」(L'imaginaire, p156)。知覚とは、志向的意識の構成であり、この構成には、(フッサールの言うように)対象の見えない部分との関係において対象を規定する「空虚な志向」が参与している。私たちは、たとえば灰皿の表面を、裏面や底面を含むものとして知覚するのであり、この、裏面、底面の「識知 savoir」は、いわば対象にはりついていて、知覚の行為に溶け込んでいるのである (ibid. p157)。

対象が知覚野の全く外にある場合には、心像 (image) が、否、心像を空想ならぬ表象たらしめている想像的意識の構成が、外界認識の根拠を作ってくれる。想像的意識とは、不在の対象を、心像を介して志向する意識であり、心像がその類同代理物 (analogon) である外界の対象について

の識知を、内蔵しているのだ。

知覚対象である灰皿の裏側であれ、想像対象である隣室の置き時計であれ、それらについての識知の具体的内容がいかにして得られたかといったことは、ここでは問題にならない。眼目は、それらの識知が知覚や想像の行為に溶け込んで来るのを可能にする、意識のア・プリオリな構造が存在する、というところにある。結局、サルトルの立場では、意識の出現と同時に、外界の認識は根本的にはもう成立してしまっている。何ものかを知覚するとは、裏や内部を備えたものとして知覚するということであり、何ものかを想像するとは、意識の外部にあるものとして想像する、ということなのだから。

このような、知覚意識のア・プリオリな構造に訴える外界認識の生得説が、発生的知見と両立しがたいことは、前章からも明らかであろう。たとえば、第4段階の幼児に哺乳びんを、底面を向けて差し出すと、自分で向け変えて乳首をくわえるが、第3段階では泣くばかりである。手で向きを変えるという動作じたいは出来るにもかかわらず、哺乳びんについての知覚的経験を豊富に積んで、《裏面》についての具体的な「識知」を所有していると思われるにもかかわらず、である(『知能の心理学』213-214頁)。ピアジェなら言うだろう。灰皿表面の知覚が外的物体としての灰皿の認識となりうるのは、知覚意識のアプリオリな構造ゆえではなく、知覚内容に、4次元的存在としての対象を意味するもの(能記 signifiant)としての、つまり、広い意味での「記号 signe」としての権能を与える意味作用(signification)の発達によってである——と。

この意味作用とは、「知能」のシステムの一側面と見なすことができる。つまり、知覚は、それとは別個の原理にしたがい発達してきた知能のシステムに組み込まれることによって初めて、《意味するもの》となりうるのだ。

発達段階を通じ、意味作用は「能記」と「所記(意味されるもの signifié)」の2項からなる。この両項の関係の構造が、知能自体の構造変化に応じて、変化してゆく。第1段階、「反射の練習」の時期でもう、意味作用について語ることができる。ひと月目の乳児は、唇に触れると乳首と服の布地の違いを識別する。乳首へは《吸う—飲み込む》という完全なシエマが生じるが、後者へは《吸う》運動がおこるだけで、途中で終わってしまう〔旧註1〕。これは、乳首の触覚印象が「意味」をもった、といえる。つまり、「能記」になったわけだ。「所記」の方はといえば、未だ、お乳といった客観的事物ではない。吸うシエマじたいである〔旧註2〕。

旧註1 このような識別作用は、再認的同化のはたらきとされる。いわゆる再認の発生である。この段階では、ベルクソンのいう運動的再認にも似て、「再認にはいかなる心像の喚起も必要ではない。再認が始まるためには、対象にたいして以前とられた態度がふたたび始動し、このあらたな知覚状況の中で何事もシエマを妨げない、ということ十分である。(中略)主体が再認するところのものは、対象それ自体であるより先に、自分自身の反応なのだ。」(construction, pl1)。ただしあまりに四六時中接しているものは、習慣の自動化作用によって意識的再認が押さえられてしまう(たとえば自分の着ている肌着の感触には再認は生じない)。つまり、同化のシエマを対象に適用するに当たって、何かがシエマに抵抗し、一瞬不適応が生ずるが、たちまちシエマの調整によって再適応するという場合に、再認的同化があると言える。

旧註2 「反射の練習」の段階で意味作用について語るというのは、「意味」を広義にとりすぎていると思われるかも知れないので、少し説明を加えておく。「単純な同化によってであれ、再認もしくは汎化的拡張に困ってであれ、感覚印象、すなわち対象を同化するとは、それをシエマのシステムのなかへ挿入することである。言い換えれば、それに《意味作用》を与えることである」(naissance, p168)。思うに、反射のなかでも下位の反射について意味作用を語ることはできまい。ところが、皮質性反射においては、そもそものはじめから、反射自体の内部的生理的な体制がいかに、探索行為の萌芽(方向づけ)、練習の累積の効果が認められるのだ。つまり、これらの反射は最初から、機能的同化(単純な同化)をおこなうものとして、いいかえれば意味作用の萌芽をともなって機能すると捕らえることができよう。

ついでであるが、皮質性反射と皮質下反射の区別は、条件反射学説への有力な批判の手掛かりを与えよう。

パヴロフの犬はブザーを聞いただけでも唾液を流す。これを行動主義心理学者は、食物という「無条件刺激」に連合された音刺激が「条件刺激」となり、唾液分泌という「条件反射」をひきおこしている、と説明する。が、この犬の行動でより本質的な反応は、ブザーに対して耳をそばだて鼻を突き出し身構えるという——たとえ体を固定されていても採る——一連の全身的な探索行動の方ではないか。そしてこれは、唾液反射とことなり、皮質性の方向づけ反射に発生的基盤をもち、最初から意味作用の萌芽を伴うのである。したがって、ブザーは《能記》であり食物は《所記》であり、犬は、ブザーを聞いて食べ物の出現を《予期》するという知能的活動をおこなったのだ、と言う説明の仕方も可能なのではないか。唾液反射のような、知能の発達とは無関係な皮質下反射をいくら寄せ集めてみても、このような行動を《反射》として再構成は出来ないのではあるまいか。

犬に《予期》という「心理作用」を認めることは擬人主義だと行動主義者は反論するかもしれない。が、逆に言えば犬に心理作用を否定することは、証明を必要とする仮説なのである。それを最初から方法的原理としてしまうことは、論点先取の虚偽の批判を受けよう*。

* ワロンは、条件付けられるのは、臓器感覚に基盤をおく情動反応だけだとする(前掲訳書、85頁)。その他、R. Efron (The Conditioned Reflex: A meaningless concept. *Perspectives in Biology and Medicine*, 9, 488-514, 1966) による批判も参照。

以上の説明の仕方から窺えるように (naissance, p168-172) ピアジェの記号論の特徴は、発達初期では意味作用の所記はまず「行為そのもの」であり、漸次、所記が行為から独立して外的対象となってゆく、とするところにある。ちなみにピアジェは能記を、標式 (indice), 象徴 (symbol), 記号 (signe) の三種に分ける。象徴はいわゆる心像であり、個人的能記だが、記号では能記と所記の関係は社会的約束に基づいていて、その典型が言葉である。両者の発生時期は同時であり(第5段階以後)、ともに表象作用 (représentation) の存在を前提とするが、標式ではそれは必要とされていない。前二者では能記と所記が完全に分化しているが、標式では所記の一部、もしくは所記との物理的因果関係の他の項が能記をなす。標式は、狭義には第4段階から現れるが、ピアジェはこの概念を拡張して、あらゆる感覚運動的同化の過程にこれを見いだしている。第3段階以前の標式はとくに信号 (signal) の名が与えられている。標式と信号の違いは、所記が行為そのものから分化しているか否かである (naissance, p169-173)。

ここで、これまでしばしば例にとってきた灰皿の知覚にもどるならば、表面の感覚印象は、発生的に言えば最初のうち、つかんだり叩いたりといった、それに対する可能な行動の下書きの集合を《意味》していたことになろう。外界問題の中核たる《背面》の意味も、おそらくは、ひっくりかえすというシマが基底となっていると考えねばなるまい。それが、可能な行動が多様となり、シマ間の協調がすすんで全体としてのシステムを形成するにつれて、意味されるものとしての《背面》も、ひっくりかえすという行為から分離独立して、重さや厚みを備えた物体へと収斂してゆくと考えられる。すなわち、感覚印象に実体的基盤があたえられる。知覚による外界の認識が成立するわけである。

それにしても、かように外界認識の根底をなすものと考えられる、行為のシステム化とは何であろうか。私たちは既に、知覚は知能のシステムに組み込まれることによって初めて《意味するもの》になるという、ピアジェの知見を紹介した。であるならば、この、行為のシステム化がそのまま知能と呼べるものなのだろうか。それとも両者はもともと別のもので、行動にシステムをもたらすのが知能、という関係にあるのだろうか。

IV章 行為、知能、認識

内観をおのれの方法とする意識の哲学になじんだ目には、思考が行為であり、行動の内化である、

という命題は、理解しがたく見えるであろう。内観にとっては思考は概念や心像の組み合わせに外ならず、行動とは思考の結果として起こるものなのだ。たとえ幼児にとって思考する前に行動することが自然だとしても、それは、いまだ行動が思考の統制下に組み入れられていないということにすぎない。両者はもともと別物であり、成長とは前者が、おくれてやって来た後者によって支配されて行く過程なのだ、と説明されることになる。

しかしながらピアジェはいう。「内観法は（ヴェルツブルグ学派のように）いかにうまく組織化され、統御されていても、思考結果に向けられるばかりで、その形成過程を内観することはできない」（『知能の心理学』訳書59頁）。なるほどこの学派は、思考を心像から切り放し、判断が一つの行為であることを示した。しかし、発生的見通しを欠き、知能発展の最後段階の分析に終始することになったことは、たとえば、論理法則の、他に還元できない究極的性質に直面したとき、心理的分析を放棄せざるをえなくなるという結果をもたらした。たとえば、「マルベは思考過程の中に、因果的に入り込んで来、心的因果のかけたところを充足する非心理的要素として、あっさり論理法則を引用している」（同訳書60頁）

そこで心理学が単に記述の学ではなく説明の科学であろうとするならば、パースペクチヴを裏返して、活動じたいの立場から思考を見なければならぬ。たとえば言語の行為と言えども「やはり一つの活動、1つの行為である。それは行為としての程度こそ低下しており、内化されてしまい、目論見という状態以上に出ないようにされている、下書き的行為ではあるが、しかし、何といても行為は行為である。それは現実の物のかわりに符号をおき、その符号を頭の中で動かしてみること、実際の運動に代用させた行為に過ぎない。これらの代表物を通じてそれは思考過程の中で操作を続けるのである」（同書74頁）。内観法ではなんといっても、このような言語的思考の活動的行為側面が無視されてしまう。ただ、活動の観点に身を移してはじめて、この心内活動の役割がはっきり浮き出して来る。この心内活動を、「操作 opération」と呼ぶ。

操作と行為の同性質性は、数学的思惟のばあいは実にはっきりしている。たとえば、 $x^2 + y = z - u$ という式においても、 $=$ は置き換え可能ということを示すし、 $+$ のしるしは結合をあらわし $-$ は分離を、そして x^2 という自乗は x を x 回だけ再生産する行為を示す。そして、 u, x, y, z という数値は、数の単位をそれぞれその回数だけ再生産するという行為を示すと考えてよい。だからこれらの記号は総て行為の言及なのである。この行為はもちろん現実のものであってもよいが、しかし数学の言葉は、それを単に抽象的に表示するにとどめ、思考的操作という心内化された行為の形でこれを表現しようとするわけだ。

これほどはっきりしないが、日常的思考でも事態は同じである。たとえば類概念や関係概念のなかにも同じような操作的性格が見いだされる。あるいくつかの事物を主体がひとつの類の下にまとめる、その事物に直面したとき主体はいつも同じ反応をする、という事実が類概念ということなのだ。同じわけで、非相称の関係は、あるひとつの行為の強度のちがいをあらわす、など（同訳書、74-76頁）。

したがって、感覚運動期第4段階（8ヶ月～1年）における「二次的シエマが概念の、その同化活動が判断の、その協調が論理的推理の、それぞれ機能的等価物である」という言い方をピアジェがしているのは（naissance, p.209-211）、何ら驚くべきことではない。ここには、乳幼児期の感覚運動的活動から後の反省的思考までを、飛躍なく、連続的に理解し得る可能性が示されているのである。そしてこの連続性は、第1段階の反射的行動、第2段階の運動的習慣、第3段階以降の感覚運動的知能（実行的知能）をへて反省的知能（思考）の段階にいたるまで一貫して、これら、諸段階を特徴づける活動の「構造」を産出するはたらきが、同化という同一の「機能」にしたがう、ということにもとずいている〔旧註〕。

旧註 ピアジェの発達観は、ひとくちに、機能的連続、構造的連続、と言える。一定の構造の出現、解体、より高次の構造への再編成が、発達の「段階」を経過する、ということである。

以下に、この同化という観点を踏まえて、感覚運動的知能の誕生の過程をみてみよう。

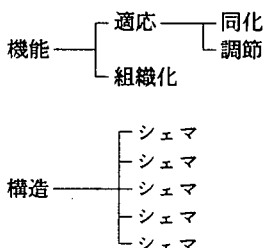
まず、生得的メカニズムの優勢な第1段階ですでに、反射の内部的・生理的な体制化がいかに、再生的同化(練習)、汎化的同化(反射のスキーマをあたらしい対象へひろげるはたらき)、再認的同化(場面の弁別)などの始まりが見いだされる(『知能の心理学』195頁)。反射のスキーマが、次の段階で習慣のスキーマへと発展することも、これらの同化活動によって新しい要素を同化し、高次のスキーマへと既成のスキーマを統合してゆくことに外ならない。条件づけのように、一見受け身的に協調をおこなうような場合でも(たとえばある信号(signal)が、乳を吸うための予期的な態度をひきおこす場合でも)、指しゃぶりのように反射の適用範囲を自発的に広げる場合でも、原理は同様である(同訳書、196頁)。

だが、第2段階における感覚運動的習慣のスキーマでは、いまだ知能について云々することはできない。知能の出現を告知するものは、志向性(intentionalité)の発現である。ところが「不幸にも志向性ほど定義しがたいものはない。しばしばなされるように、ある行為は表象作用(representation)によって導かれているならば志向的、といえるだろうか?」けれど、表象作用というものを狭義に解するならば、箱を開けて中の果物の見つけ出す行為は、その果物の表象作用によって起こされる場合のみ志向的ということになる。しかしながら「後に見るように、心像(image)や個人的象徴といった種の表象作用は、遅れて出現すると考えてよいあらゆる可能性がある。心像(image mentale)とは知的行為の内面化の産物であり、前提的与件ではない。」かくしてピアジェは、感覚運動的習慣と志向的行為を別つのは「行為の刺激とその結果の間に来る介在物の数」とであると結論する(naissance, p132)。

つまり、行為における手段と目標の分化、ということである。第2段階に見られる、指しゃぶりのような「一次循環反応」では、習得された行為を再生することが目標なのだから、手段とは未分化のまま。これが第4段階になると、おもちゃをつかむために障害物を払いのける、といった行動が可能になるが、ここでは手段のスキーマ(払いのける)と目標のスキーマ(つかむ)が明確に分化し、かつ、目標は手段的行為の実行より以前に立てられていて、しかも、行為そのものではなく外象の対象に向けられている。

このような意味での志向的行為が可能になるためには、スキーマ相互間の協調、とりわけ「見る」スキーマと「つかむ」スキーマの協調を要する。この協調の完成をもって第3段階の開始とされる。したがって第3段階は、真の感覚運動的知能への過渡期である。このスキーマの協調をつくり上げる原理もまた、II章で少し触れたように、スキーマの相互同化という名の同化活動なのである〔旧註〕。

旧註 相互同化は、スキーマの組織化(organisation)の原理である。組織化とは、適応(adaptation)の内的側面である。ちなみに



最初、手の運動と視覚との関係は、視線が手の動きを追うという、一方的関係だ。見ることが手の運動に影響を与え始めるのは、4ヶ月目に入るところだ。もっぱら吸うために手を近づけた際、動きを止めてまじまじと見詰めることがあるのだ。これをピアジェは、「手は、目によって見られている運動を保持し、繰り返す傾向がある。ちょうど、目が、手がなすあらゆることを注視する傾向があるように。言い換えれば、手はそのシマに視覚的領域を同化する傾向がある。ちょうど、目がそのシマに手先の領域を同化するのと同様に」(naissance, p99)と説明する。これが相互同化である。

4～6ヶ月を通じ、見える物をつかむという協調が発達する。ただし、最初のうちは、自分の手とつかもうとする対象が、同時に視野になければならないという限界がある。この協調は偶然がきっかけをなし、「……物をつかんでいる手を見ながら、幼児は、目が見詰めている光景を維持しようとする。目でもって、手がやっていることを見続けるのと同様に」(naissance, p106)というやはり相互同化の原理によって《見る一つかむ》という二重シマが成立し、以後はこのシマの同化活動として発達するのである。

おそくとも7カ月の初めごろまでには、手を同時に見なくても見るものをつかめるようになり、協調は完成する。これは同時に、2次循環反応のシマを可能にする。

ゆりかごの天井からガラガラと紐が下がっているという状況での第3段階の幼児のふるまいを観察して見よう。最初、幼児は、たまたま紐を見てつかんで引っ張る。《見る一つかむ》シマによって紐の視覚像を同化したわけだ。その結果、ガラガラが鳴る。これに驚いて、鳴り終わるや紐をひっぱるという行為を、何度も何度もくりかえす(むろん、まだ紐とガラガラの空間的關係への理解があるわけではない)。これが、2次循環反応の典型例である(『知能の心理学』197頁)。ここには志向性の芽生えが認められるが、限界もある。目標は、偶然えられた結果の延長でしかないからだ。真の志向性があるといえるためには、目標が、実際行動以前に立てられる必要がある(naissance, p200)。

じっさい、志向性の未発達は、第4段階まで、知覚野から消失した物体への真の能動的探索行為を不可能にする。目標物を隠している遮蔽物を取り除くという行為が起こるためには、《見る一つかむ》シマがまずもくろみとして活動し、(目標が立てられ)、この活動に導かれるかたちで手段のシマが作動し、遮蔽物を「同化」しなければならない(取り除かなければならない)。

このような構造を備えた活動(真の感覚運動的知能の活動)には、2つの重要な進歩が前提される。第一に、2次循環反応によって形成されたシマ同士の協調である。そして第二に、この協調じたいに融通性が出てくること。つまり、手段のシマを、目標や取り除くべき遮蔽物の性質に応じて変化させることができるようになること(ただし、いまだ、既成のシマをいろいろ変化させる域にとどまる。シマそのものを行為の過程でとっかえひっかえできるようになるのは、第5段階に入ってからである)。この2つである。

V章 概念は感覚運動的シマから連続的に発達する

A. 操作と群性体

以上のような過程をへて、第4段階にいたって感覚運動的知能が形成され、真の探索行為も可能になるわけである。ここで、この知能があくまでも実行的知能であり、その中では認識は《真か偽か》ではなく、《成功か失敗か》によって測られるということを強調しておかなければならない(naissance, p.211)。ものの客観的永続性を理解したとは、知覚野から消えたものを発見できるようになる、ということに外ならず、3次元の物体の概念を獲得したとは、逆向きに与えられた哺乳

瓶をひっくりかえして吸い口をくわえられるようになる、ということに外ならない。すなわち、これらの行為を成功裏に果たすに足る、シエマのある体系を身に備えることに外ならない。

私たちは、今や、少なくとも感覚運動的知能についてなら、第三章の末尾において立てられた、知能と行動の関係について答えることができよう。この知能は、知覚とそれに引き続く運動からなるシエマというものの、組織化の結果であり、構造化なのである。

だが、これではやはり、行動と反省的知能の間にはいぜん越えがたい溝がある、という人もいるかもしれない。実際、これまでその誕生のさまを追ってきた感覚運動的知能と概念的思考(反省的知能)とは、あまりにも異質に見えよう。けれどピアジェは、ここでも、後者の前者からの連続的な発達を主張する。それは、行為図式が「内化」と複雑化によって、「群性体 groupement」と彼が称するものを構造とする「操作 opération」へと変容するという過程として理解され得るのである。

以下にこの過程を説明するが、その前に、群性体について一言しておく。これは、感覚運動的知能と区別される操作的思考独自の構造として考えられたものであり、代数学の群 (groupe) 構造に対応するものである。すなわち、活動が以下の5つの条件を満たすとき、そこに群性体があると言える。(『知能の心理学』90頁以下)。

1. 合成性 Composition* 1。
2. 可逆性 Réversibilité * 2。
3. 結合性 Associativité* 3。
4. 一般的同一操作性 Opération identique générale* 4。
5. 同義反復性または特殊的同一性 Tautologie ou Identiques spéciales* 5。

* 1 ある一つの群性体を構成する任意の二つの要素は、これを合成して同じ群性体の新しい要素をつくることができる。たとえば、二つのクラスAとA'を合成して、この両方を含むクラスBを作ることができる($A+A'=B$)。また、 $A<B$ および $B<C$ という二つの不等関係を合成して、この二つを含む $A<C$ という不等関係を作ることができる ($(A<B)+(B<C)=(A<C)$)。

* 2 どんな変化変形も可逆的である。いったん合成した2つのクラスや2つの関係も、これを新たに分離してしまふことができる。すなわち、 $A+A'=B$ なら、 $B-A'=A$ である。これは知性のもっとも重要な特徴である。知覚や運動的習慣には合成性はあっても可逆性はない。逆の方向の運動をやれるように学ぶことは、別の新しい習慣を獲得することではかない。

* 3 2つ以上の操作があるとき、そのうちどちらを先にやってもよい。 $(A+A')+B=A+(B'+B)=C$ 。つまり、思考は、いつでもまわり道をする事ができる。

* 4 ある操作は、その逆方向の操作と結合させるとゼロになる。 $A-A=A'-A'=0$ 。思考は、あることを考えて行き詰まれば、また逆戻りして出発点に戻ることができる。

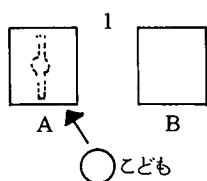
* 5 思考では同じ操作をいくらくり返しても変化が起きない。 $A+A=A$ 。たとえば、猫のクラスと猫のクラスを足したものはやはり猫のクラスにすぎない。

こうしてみると、操作は行為図式の単なる内面化ではないし、まして、ある一つの操作を発生的にある一つの行為図式に対応させるといったこともできないことは、おのずと明らかになろう。両者は構造がちがうのである。

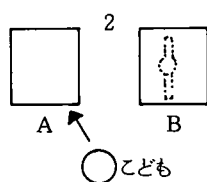
B. 感覚運動的知能の限界

さて、第4段階に達し、真の探索行為ができるようになって、それでもの客観的永続性の理解が、実行的知能の水準においてさえも完成したわけではない。状況を少しばかり複雑にすると子供はもう、隠された対象を見つけ出すことができなくなってしまうのだ (construction, p47-51)。

なにか興味をひく、たとえば腕時計といったものを、まず、座布団Aに隠すとす。子供はすぐ、Aをとりのけて腕時計を見付け出すことができる。つぎに、腕時計をとりあげて、こんどは、



Bの下に、目前で隠す。すると、こどもはBをさがさずにAを探すのである。何度おなじ実験をくりかえしても、最初探索に成功したほうのAばかりを探すのだ(左図)。あたかも、腕時計をひとたび発見するのに成功した同じ場所、同じ行為が、いつでも同じ発見をもたらすと信じているかのよう。物体は、いまだ、真の客観的永続性を備えてはいない。自身の行為を含む、全体的状況から充分独立のものとなっていない、こどもはいぜん、自己中心性と現象主義的世界観を克服してはいないのだ。



「第4段階エラー」の名の下に、多くの研究者の追試実験をうながしたこの現象も*、生後一年を過ぎる頃には見られなくなり、幼児は第5段階に入る。この段階の知能は、新しい手段の発見ということで特徴づけられる。前段階では、目標を達成するための手段として、既存のいろいろな行為図式を適用するという活動が見られた。この段階になると、それだけではなく、

目標にふさわしい手段をもたない場合、能動的実験をつうじて、あらたな手段を作り出すことができるようになる。同化-調節の理論からいえば、これまでは、対象を同化する活動によって行為図式そのものが大きな変化をこうむることはなかったが、この段階では、行為図式を目標に適用する際に、その活動の仕方を目標にかなうようにどんどん変化させ、あらたな手段を作り出してゆく。つまり、調節の優位と称されるのである。

* たとえば、Evans, W. F. & Gratch, G.: The Stage IV error in Piaget's theory of object concept development. *Child Development*, 43, 682-688, 1972.

が、この段階でも、隠されたものの探索には、ある種の限界が見られる。腕時計を、ついでAの後ろにもって行き、つぎにベットBの後ろへ、さらに座布団Cの下へ運んでそこへ置く。移動中の腕時計が見えるならば、こどもはすぐCへ行って捜し出すことができる。けれども、移動の過程が見えないばあい、たとえば、腕時計を手の中へ握ってかくしてからAの後ろに運んでそこへおいた場合、こどもは、手の中を探し、ないと当惑するが、Aをさがすことはしない (construction, p62-64)。

この限界はなにに由来するのだろうか。つぎの段階で取り上げられる、表象能力に関係したことである。

この、2年目の後半を占める第6段階では、行為図式のあいだの協調というものが、頭の中もしくは心の中で (mentale) 行われるようになる。すなわち、こどもは、ある種の問題に直面したとき、これまでのように即座に行動に移るのではなく、考えるように見える。内部的試み、もしくは内面化された活動によって探索行為を続けようとしているように見えるのだ。

それにしても、内面化 (intériorisation) とか、心の中で (mentale) とは、いったい何を意味しているのだろうか。それは、行為図式の間相互同化による協調が、一段と自発的かつ迅速に起こるようになる、ということで説明できないのだろうか。ピアジェはこのような行動主義的説明をとらず、表象作用 (représentation) の発達によって、行為図式の協調のはたらきの中へ、象徴 (symbole) が能記として入り込む、というふうの説明する。行動主義と対置される意味での心理主義 (mentalism) といえよう。

C. 心像の起源

かくして、表象作用によって、第6段階は感覚運動的知能の完成であるとともに、次の表象的思考の時期の開始ともなるわけだが、ここで問題となるのは、象徴、とくに、その一つとされている

《心像 image mentale》の機能と起源である。第5段階の限界が克服され、ものの移動する過程が見えないときでも、間違いなくそのものを捜し出すことができるようになるのも、この、心像の働きによるのである。ただし、心像が、消えたものを意味する《能記》でありうるのは、鮮明さとか、直接知覚との類似といった、心像じたいの性質によるのではない。諸々の行為図式の知能的構成の中に組み入れられることによるのである。この点は、心像ならぬ直接知覚像のばあいでも同じことで、そもそも知覚像に実体的基礎を与えること、知覚の場を越えた客観的世界を意味するものとしての能記の権能を与えることも、知能的構成にぞくする。

加えて、心像じたい、運動的起源をもつとされる。ピアジェは、心像とは模倣のメカニズムの内面化の産物であるという結論を導き出す。模倣とは、対象の性質を行為によってあらがきすることであり、行為図式の調節活動の一例である。ところで心像もまた、対象の性質の粗描き——ただし頭のなかでの粗描きなのだ。結局のところ、知能という構成的活動に能記を提供するのは、これもまた、模倣という活動なのである。ピアジェの立場は、ここでも、内観心理学や現象学的心理学とは相入れない、行為の心理学 (psychologie de l'acte) なのだ。

次の例は、行為図式の協調活動の中に入り込んで問題解決をたすける心像が、いまだ模倣活動から完全に内化されていない、移行的段階の例として、しばしば取り上げられる有名な観察である。

観察180 空のマッチ箱の中に懐中時計の鎖を入れ、10ミリだけ隙間を残して閉めてローラン(1歳4カ月0日)に示す。かれは隙間に指をつっこんで、鎖をつまんでひっぱり出す。つぎに、隙間を3ミリにする。かれはマッチ箱の開け閉めの方法は知らないし、もちろん鎖を箱に入れて閉めるところは見せていない。だから鎖を取り出すためにかれのやることは、箱をひっくりかえすことと、隙間に指をつっこむことだけだ。隙間に指をつっこもうとするが、狭すぎて失敗する。それからかれはしばらく休止している。そしてその間に、その隙間を注意深くながめる。それから数回つづけて、自分の口を開いたり閉じたりする。最初はわずかに、それから次第に広く。この行動の後、かれはためらうことなく、指を隙間にやってそれを広げ、鎖をとりだした。(naissance, p293. 原文を整理して例示した。)

つまりローランは、マッチ箱の隙間をひろげる運動を自分の口を使って模倣した。これがやがては、外の行動には現れないで、まったく頭の中で (mentale) 行われるようになる。それが、心像だというわけである。

心像の成立は、第6段階において、「延滞模倣」が可能になることによって確かめられる。ジャクリーヌは1歳4カ月3日のとき、隣家の男の子が、ベビーサークルの中で足を踏み鳴らして痾癩を起こすのをびっくりして眺めたその翌日、さっそく全く同様の行為に及んだ (La formation du symbole chez l'enfant, p64, obs. 52. 以下 formation と略記)。つまり、対象の下書きを心の中でだけ作っておき (心像を形成し)、一日のちに行為にあらわしたわけである。

それにしても、心像は模倣の内面化といったこととは別の起源 (例えば記憶痕跡) をもってこの時期出現し、外部から介入して延滞模倣を可能にする、といった、より常識的とおもわれる解釈ではなぜいけないのだろうか。ピアジェは、三つの理由によってこの解釈をしりぞける。第一に、これ以前の段階では心像の存在は確証されなかった。ゆえに、最初期からその発達を連続的にたどってゆける模倣活動の内面化として解釈するのではなければ、なぜ、そしていかにして第6段階で突如として心像が出現するのかという、難問に直面してしまうだろう (旧註)。

旧註 ピアジェの記憶発達論によれば、感覚運動期第1～第2段階では、記憶の唯一の形は、再認、それも運動的再認であって、記憶心像の喚起も、その時間的位置付けもない (construction, p286)。第3段階にな

ると、母親が背後にいと、時々ふりかえって見るといった行動が現れる (construction, obs. 170)。これは、記憶の時間的位置付けの始まりだが、心像の喚起は必要としない。いまだ「運動的記憶」にとどまり、「表象的記憶」の域には達していないのだ (construction, p287-293)。

第4段階、隠されたものを見付け出す行為で、「初めて、こどもは、行為 (action) ではなく事柄 (evenement) そのものを思い出す能力をあらわす」(naissance, p296)。けれど、前に図で示した第4段階誤謬は、「位置Aと結合した行為の実行的記憶がいまだ移動の順序の記憶総てに勝っている」(naissance, p297) ことを示しているという。

第5段階でも、いぜん、記憶心像の存在には懐疑的だが、「たとえ、喚起すなわち過去の事柄の表象があるとしても、たんに過去を再生すること、直接知覚されなかった移動の表象を心の中で組み合わせることは別のことだ」(naissance, p301) という箇所や、「……不在の対象の、心像もしくは記号体系による喚起としての表象作用は、第6段階およびその前段階になってからしか殆んど現われることがない……」(naissance, p303) と述べている箇所など、いささか曖昧な所がある。

第二に、模倣がしばしば無意識裡に、心像なしに行われることは、私たち自身、すこし内省してみれば分かることである。模倣してのち、モデルが何かを思い出すことも多いのである。第三に、そのようなものとしての心像じたい、材料は感覚的であるとともに運動的でもある。音楽のイメージには体のリズムカルな動きが伴うし、静物をイメージするときでさえ、眼球の微細な運動がともなう。

それにしても、かように心像の起源を模倣という活動に求めようとする、心像と感覚との、または想像力と知覚との関係はどうなるのだろうか。二歳以降、「心像は固有の生命を獲得」(formation, chap. III) し、以後は模倣は表象的模倣の段階にたつて心像に先行されるようになる。この水準にいたってもなお、心像は、感覚知覚ではなく何らかの調節的活動によってそのつど生み出されるのだろうか。

この問題に対し、ピアジェは《知覚そのもの》から《知覚的活動》を区別し、後者を、生涯を通じ心像を生み出す調節活動とすることによって肯定的に答えをあたえる。すなわち、感覚運動的知能は、生涯を通じて知覚そのものと概念的知能の欠くべからざる仲介者として残るのであり、この感覚運動的知能の継続を知覚的知能もしくは《知覚的活動》と呼ぶのである (formation, p78) [旧註1]。すると、そこで「心像を、表象作用の最高段階においてさえ、不断にあらわれる感覚運動的図式から生ずる内的模倣として見るのが可能になる。心像はしたがって知覚そのものの継続というよりも、最初期の18カ月間に固有の感覚運動的知能から出て来る初歩的な形の知能であるところの知覚的活動の継続である。そして最初期の知能の調節が感覚運動的模倣を構成するように、そのように知覚的活動の調節が心像を構成する。それがかくて内面化された模倣である」(formation, p79-80) [旧註2]。

旧註1 ゲンタルト心理学の説く、発達水準にかかわらず成立する全体的《ゲンタルト》を決定するようなメカニズムは、知覚そのものに関係する。それは、いわば受容的で直接的な知覚である。一方、知覚的活動の存在は、知覚の発達によって示される。ピアジェはいわゆる錯覚を、年令と共にかなり規則的に弱まる一次的錯覚(デルブフの錯視、オッペルの錯視、ミュラー・リアーの錯視など)と、かえって強さを増す2次的錯覚とに分ける。このような変化を齎すものが知覚的活動である。この活動は、視覚のばあい視線の移動と相互調整という形で現れる。知覚空間はけっして等質ではなく、つねに中心化されており、注視の対象は注視という活動じたいによって拡大されて見える。知覚の発達とは、それゆえ、視線をあちこちに移動させ、複数の中心化を相互に協調させることでこのような歪を修正して行くという、脱中心化にある。1次的錯覚の弱まりも脱中心化やそれに基づく調整作用の結果である。他方、2次的錯覚は、大きさや形の恒常性、綿一貫目より鉄一貫目の方が重く感じるといった重さの錯覚などで、知能的構成へと近づいてゆく知覚的活動と、ももとの知覚(一次的錯覚をも含めた)との間の干渉、矛盾の増大として解される(La psychologie de l'intelligence, p87-89, 訳書, 158-162頁)。

旧註2 なお次のくだりを引用しておく。「私たちが視覚的光景を知覚し、続いて心像を形作るときに生ずる

過程は何であるか。私たちは知覚的調整と比較とにのみ基礎をもつ活動を使用して、分析し、比較し、変形する。かく分析された諸要素や諸関係に意味を与えてくれる概念の働きに、活動は統合される。心像を生み出すものはこの知覚的活動であって、知覚そのものではない。心像とは知覚された対象の要約的図式もしくは写しのようなものであって、感覚的活力の継続ではない。」(formation, p80)

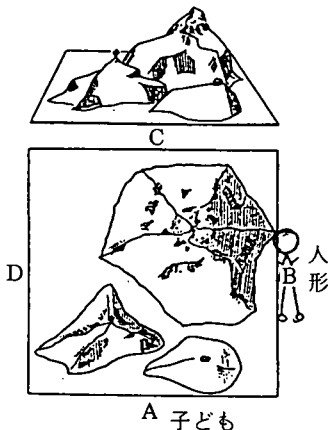
かくして第6段階は、感覚運動的知能の完成であると同時に、つぎの表象的思考への移行の時期なのであるが、しかし、活動そのものという領域にとどまっているこの知能的構成は、いまだ真に思考の体をなすものではない。感覚運動的行為図式の構造が、いわゆる操作にまで発展し、反省的知能を形作るためには、2歳から始まる言語発生期から児童期末にいたるまでの、思考の全面的な発達を要するのである。ここではこの展開を追跡してゆく余裕はないが、いくつかの重要な点を指摘するにとどめよう。

VI章 表象的思考から操作的思考へ——《他人の観点》という残された問題

すでに言及したように、概念的知能は、感覚運動的知能を、心像や言語の助けを借りて内面化しただけのものではなく、両者のあいだには根本的な構造上のちがいがあつた。感覚運動的知能は、知覚と運動の継起からなっているので、表象することによって過程全体を再構成することができないし、またこれと同じ理由によって、ただ実践的な充足にみちびくだけで、認識そのものには至らない。それは説明も分類も立証も求めない。真理の探求とは無関係な主観的目標の為のみに、因果的結合を行ったり、分類や証明をおこなったりする。これが、新しい理解体系へ向かって完全なものになることができる前に、知能は全く作り直されねばならない。

たとえば、2年目に入ればこどもは哺乳びんをひっくりかえすことができるようになるからといって、そこに表象能力が加わりさえすればそれでも、一連のひっくりかえしの運動を思考の中で表象できるようになるというわけではない。これができるようになるまでには、直接の活動の中で既に克服した障害と同じ障害、ただし直接の活動の面から新しい面に移しかえられた障害にぶつかることになるだろう(『知能の心理学』231頁)。

思考の中での「ひっくりかえし」に関しては、主体が対象のまわりを回転するという仕方と、対象自体が回転するという、二つのやり方で行うことができるが、前者のばあいを例にとつて、このあらたな障害を明らかにしてみよう。四角のテーブルの上の山の模型をこどもに見せ、Aに座らせて、別の辺、たとえばCに人形をおく。そして、何枚かの山の絵のうちから、人形から見た山の光景を選ばせる(波多野完治編『ピアジェの発達心理学』84-85頁)。



て、別の辺、たとえばCに人形をおく。そして、何枚かの山の絵のうちから、人形から見た山の光景を選ばせる(波多野完治編『ピアジェの発達心理学』84-85頁)。

4, 5歳という象徴的思考の時期のこどもでは、課題の意味すら通じない。直感的思考の時期のこどもは、自分の観点から見た光景なら、正しく選ぶことができる。けれど、人形から見た光景を選ぶのに、いつも自分の観点から見た光景を選んでしまう。あらかじめ、テーブルの回りを歩かせて観察させてもそうなのだ。つまりこどもは、自分がみているものと同じものを、どこからでもだれでもが見ることが出来ると信じている。感覚運動的知能における自己中心性が、行為じたいとその対象との未分化によるものであるとしたら、ここでの自己中心性は、自己の観点と他人のそれとの未分化に起因する。この障害は、7~8歳を通じ克服さ

れ、具体的操作期に入る。

この例でも示唆されるように、操作的思考(とその群性体)の成立にとって、自他の分化と協調(そしてまた一般に、社会的相互作用)は、ぜひ必要なものである。じっさいピアジェは、客観性や証明の欲求などは、操作的思考の条件であると同時に、社会的な義務なのであり、「社会的協働関係だけが、論理をつくりあげるものなのだ」(『知能の心理学』304-306頁)とまで、「社会的要因」を強調する。

ここで、「それならば自己の観点と区別される他人の観点を、こどもはいかにして知ることか」という問題が生じるだろう。しかしながらピアジェの発生的認識論においては、他我認識の問題は、外界認識の問題と対等の扱いを受けてはいない。まず、幼児じしんの見地からすると、感覚運動期第5段階までは社会的生活は物理的環境からまだ本質的に分化していない、とされる。「人々がこどもに対して用いる記号も、こどもにとってはただ信号ないし標識にすぎない。こどもに強制される規律はまだ意識的な義務とはなっていないで、習慣特有の規則正しさと混同されている。こどもにとっては、現実を作り上げているものはすべて、絵のように見なされている。人物の場合も同じである。ただ、とくに、能動的で、思いがけなくあらわれたり消えたりする絵であって、一段とつよい感情の源泉となっている、という点だけが、ちがうのだ。」そうして、「感情という見地から見ると、おそらく、物の概念が作られる段階ではじめて、感情が人物に投射されるのだ。このとき初めて、人物も、こども自身とは無関係な活動の中心として、みなされることとなる。」(同訳書、297-298頁)。

結局、他我認識の問題は、固有の問題としてはついに提起されないまま、言語習得期に入り、「こどもが、そばにいるひとたちと会話をするばあい、たえず、自分の考えに、同意されたり反対されたりするのを体験して、自分の外側にある思考の巨大な世界を見いだす」(同訳書、299)ということになってしまう。発生的認識論における重大な弱点といわなければならないのである。

私たちはこれまで、新生児の定位反射から概念的思考までの《外界認識》の発達を、連続的に理解しうるものとして追跡してきた。けれど、ここにいたって、連続性の中の間隙を、間隙を埋めるものとして密輸入された《他者の観点》なるものを、見いだす。ピアジェの発生的認識論をその代表とする行為的能動的知識観によっては、せいぜい感覚運動的な水準での外界認識までしか、破綻を来たすことなく説明できないのだろうか。

ピアジェの世界を、《物》だけが客観的に実在し、《他者》の主観性は、自己のその《投入》とみなすという、一種独我論的体系として再構成することによって、破綻から救うことができるかもしれない。上記の図の例で、他人の観点というものを、徹頭徹尾、時間と場所とを異にする私の観点として、解釈することである。こどもは、具体的操作期に入っても、何も、私の観点と他人の観点の協調ができるようになるわけではない。私の今、ここの観点と、テーブルの別の側にいたときの私の観点とを、協調させられるようになる、ということなのだ。したがって、前述の、思考の中の「ひっくりかえし」の二つの種類は、ひとつに帰する。対象を回転させることも、対象の回りをこちらが回ることも、同じく私の内部で完結する操作であって、区別はないのだ。個人の内部での操作の発達が、時間的により普遍的なものになれば、おのずと、そこに他人の観点というものも統合されるだろう……。

もっとも、こう考えたとしてもなお、リップスの感情移入説が蓬着したのとおなじ困難——なにゆえに、ある種の観点が、私ではなく他人の観点として感じられるようになるか、という問題が残るのであるが。ここでは、この困難を乗り越える方略はかんがえられないではない、ということを書き記すにとどめよう*。

* 鍵は、私たちの日常的意識においては、自己もまた、「ひとりの他人」としてしか認識されてはいない、

というところにある。後に示すように、感覚運動的知能から発達した操作的知能とは、ほんらいが対物機能であり、対人機能ではない。それゆえ、その発達は、必然的に、《私の身体》をも対象化するさい、《物体のあいだのもう一つの物体》として了解せざるをえない。同時に、私の観点は、物体と化した私の身体から放逐され、上空を飛行する抽象的な視線となる。この無人称的視線からすれば、《私の身体》であるところの物体に投射されることも、《他人の身体》であるところの別の物体に投射されることも、そのメカニズムには違いがないのであろう。

感覚運動的図式からの連続的発達という側面で、概念的操作的思考へのあゆみを、ピアジェ自身のことばをかりてまとめよう。「象徴的図式は、機能の分化した感覚運動的図式が統合されている。だから、模倣的調節作用は、心像的能記にまで展開されるし、同化作用は、所記を決定するのである。直感的(思考の)図式は心像的図式(象徴的図式)の協調であると同時に、その分化である。具体的操作の図式は、可逆的な操作の域にまで高められた直感的図式の群性体である。その操作への高まりは、まさに、直感的図式が群性化されるということに基づいているのだ。最後に、形式的(操作の)図式は、二次的な操作の体系であり、したがって、具体的な群性体について操作する群性体にほかならない」(同訳書、287頁)。

Ⅶ章 結 論——内観を超える、《外界存在の知識の起源》

A. 下部論理

私たちは、ようやく、私たち自身の、すなわち、反省的知能における、外界の認識について語りうるところまで達した。ピアジェは、操作的思考における操作の群性体の三つの体系について述べているが、そのなかで、分類や系列化などの論理操作をする第1の体系や、目的と手段の関係を表現する、価値についての操作である第3の体系と並んで、物を物として構成する操作の作業は第2の体系をなすという。この第2の体系における操作の根本を、下部論理 (infra-logique) と称することができる(『知能の心理学』101頁では、「上部論理」などと誤訳がなされているが)。第1の論理操作の方は、不変と考えられる対象について、それらを相互に結び付けることからなっているが、下部論理操作は、これら対象の不変性(保存性)そのものにかかわるからである。

保存性は、個々の対象についていえば、《物》の概念の発達について概観してきたように、感覚運動期に成立する。ただし、直接の活動の場では完成されたとしても、後の段階でもまだこどもは、山が遠足の途中で実際に形を変えようと思っていたりするように、遠い空間時間のことがらについては、完成はかなりおくれるという(同訳書、246頁)

一団の対象に関する保存性の形成はさらにおくれ、象徴的思考と直感的思考の段階の全期間が費やされる。完成するのは7~8才頃で、数の保存、質量保存をはじめとして、空間を構造化する質的な操作(空間的連続の順序、間隔ないし距離の包摂関係に関する操作。長さや面積などの保存。座標系の完成。遠近法と切断面の理解など)、異なる早さをもつさまざまな運動に共通の時間の概念、などが成立することになる。

これらの下部論理的操作ないし空間時間的操作の成立とはほぼ時を同じくして、論理的操作も可能となる。両者は、その性質、機能、成立のすべてにおいて正確に平行していることを示すことはたやすい。例をあげるならば、ピアジェは論理操作の基本的群性体を8つあげているが、うち、最も簡単な群性体である、クラスについての上下の包括関係を規定する分類の群性体に対応する下部論理は、「部分の総合、それらの階層的全体化である。こういう操作の究極が、人間の考える対象世界全体である」(同訳書102頁)という。次に、論理操作の群性体の2番目のものは、不等関係の系列化である。これに対応する下部論理は、空間的遠近の秩序や時間的順序、そしてまた、質的な

時間空間の移動——量的測定を伴わない単なる順序の変更——である……。このように、残り6つの論理操作の群性体にも、それぞれ時間的空間的群性体が対応し、両者は一つの全体の異なる二つの側面とも言えるわけで、孤立化した理解はありえないという。

B. 外界存在の知識の《起源》と《根拠づけ》

以上のごとく、ピアジェの発生的認識論によって意識化され対象化された行為的能動的知識観によれば、外界存在の知識の淵源は認識に先行する探索行為にあり、その開始はひっくりかえしたりつかんだりする感覚運動的図式の一定の構造化である、ということになる。机の《知覚正面》がその知覚されない《背面》をもつということ、いいかえればこの机が《意識内事象》でなく外界の存在事物であるということの意味は、原始的には、知覚正面にたいして、つかんだりひっくりかえしたりの行為をなすことができる、ということなのである。この意味において、まさしく、「背面の存在を確かめるにはひっくりかえせば良い」のである。

このように、感覚運動的図式の構造化としてできあがった《物》の概念は、さらにその後の発達をつうじて、「下部論理操作の群性体」としての時間空間的構造へと統合され、私たちが理解するところのいわゆる客観的世界をかたちづくわけである。そうなってもなお、その本来の行為的意味は、いささかも失われるわけではない。実行的知能にとっての《物》の認識とは、実際にひっくりかえすことであったとすれば、概念的知能におけるそれは、ひっくりかえしたり、測ったり、刻んだり、酸で溶かしたり、燃やしたりといったあらゆる行為を考えることができ、しかもそれら《行為の考え》つまり操作の間に矛盾がない（構造化されている）ということに外ならないのである。

ところでこのような、対象的世界への操作というものの数は事実上無限であり、またそれらの構造化の仕方も無限に高次の可能性があると考えられる。ということは、客観的世界というものは無限に豊かであり、その認識には終わりが無いということの意味するだろう。このような知識観は——その行為的能動的基底をふくめ——自然科学的な知識観そのものといえよう。じっさいピアジェの発生的認識論とは、自然科学、とりわけ物理学と数学の基礎づけの理論でもある*。

* ピアジェによれば発生的認識論としての心理学は生物学によって基礎付けられ、生物学はさらに物理的科学に基礎付けられる。つまり、諸科学の基礎付けの関係は、従来かんがえられてきたようなピラミッドの関係ではなく、円環状なのである。

このようなものとして解明された《外界存在の知識の起源》が、内観の及ばぬものであることは納得できるであろう。そもそも、《感覚印象》や《ゲシュタルト》ではなく《行為》のような、内観もしくは意識の言葉では——つまり、現象主義的には——とらえ難いものを心理学的説明の基本単位とするというピアジェの立場じたい、ヴェルツブルク学派の内観法による思考過程説明の挫折を踏まえたものであった*。

* 心理学的説明が意識を溢れでるとするのは、最初から意識を度外視する行動主義はいうまでもなく、無意識にうったえる精神分析にも、情報処理過程を基本にする認知心理学にも、共通の認識である。

さらにいうならば、行為にせよ、また、同化、調節、均衡といった知能発達の基本的な説明原理にせよ、外界の存在を前提した概念と考えられるのである。したがって、私たちの探求の結論として、つぎのことが言えるのではなからうか。

——ヒュームは、外界存在の知識の起源を、みずから創出した連合心理学をもちいて経験的に探究した。けれど、見い出された起源じたいによっては外界の存在を根拠づけ(justification)することができず、不可知論もしくは懐疑論にとどまったのだ。これに対して、私たちは、ピアジェ

の発生的認識論をもちいて同様の探究をこころみ、「外界存在の知識の起源は、外界存在を前提とした説明の体系によらなければ解明不可能である」らしいことを見いだしたのだった。カッコの部分、さらに論理的に明確にすれば、「外界存在の概念は、それ自体いがいの何かから導き出した、説明されたりすることができず、かつ、その否定が背理をまねくという、根源的概念である」ということになる。これは、ある意味で、外界存在の根拠づけといえないだろうか*。

* この正当化は、発生的認識論という経験的性質の理論に依存しているいじょう、蓋然性をまめがれない。ピアジェ理論には、前章で指摘したような難点があるし、今後の経験的研究によって完全に乗り越えられる可能性もあろう(らしいという表現を用いたのはこの理由による)。このような蓋然性は、科学に依存する哲学理論の宿命であろう。

おもうに、外界存在への疑いとは、個々の事物の存在への個々の疑いの総和と、事物が一般に知覚されなくとも存在しうる可能性への疑いの、混同に由来する、虚偽の問題なのではないだろうか。背後の置き時計や花瓶といった個々の事物なら、いくらでも疑いうるし、またその疑いは正当でもある。が、それらの個々の疑いをいくら積み重ね、総和してみても、外界存在一般への疑いはそれとはまったく次元を異にした問題であろう。後者の疑いとはとどのつまり、それに対応する精神状態の現実でありえない、ラッセルのいうところの「言葉だけの疑い verbal doubt」(Our knowledge of the external world)にとどまるのではないだろうか*。

* この主張は、ピアジェにおける物の概念の生得性否定とは矛盾しない。物の客観的永続性を理解していない新生児は、物の主観性をも理解しているわけではない。感覚運動的知能の水準での《理解》一般が可能となる時期(第4段階)には、同時に物の客観的永続性も可能となるのである。

補論 外界存在の知識の起源から、他我存在の知識の起源へ

かくして、私たちは、(その原型を18年まえの卒論にまで遡ることのできる)上記の諸章において、いわば「ヒュームに構えを学び、ピアジェの武器を借りることによって」外界問題に対し、ある程度の決着を付けることができたようにおもう。

それでは、同様の武器と構えによって、いよいよ他我問題にいどむ時がきたのだろうか。私たちの、他我存在への信念の由来を探究し、「他我存在の知識の起源は、他我を前提とした説明体系によらなければ解明不可能であるらしい」という結論にたっすることを期待すべきだろうか。

けれども、ここで私たちは、まったく異なる状況に面と向かわざるをえない。ヒュームの構えを採っても、借りるべき武器がないのである。6章でもふれたように、ピアジェの理論は他我認識の問題を真に提起しないままに他者の観点を密輸入している。外界問題にあれほどの威力を発揮したピアジェ理論だが、他我問題には役に立たないのである(ただし、ピアジェの、模倣を循環反応としてとらえる見方と観察データとは、その理論的文脈を脱胎換骨することによって、利用できる)。そうして、このこと自体、外界と他我とが、問題として異質であることを示唆するのではないだろうか。

なぜピアジェが他我問題をとらえそこねたかという、かれが心理作用の基本的単位とみなした《行為》というものの機能は、じつは《人》に向かうより《物》に向かうという、「対人機能」より「対物機能」を本来とするものだからではなからうか。ワロンの、《姿勢反射》の説は、この点を明らかにしてくれるかもしれない。すなわち、ワロンは、最も初期段階では感覚刺激への反応は、原始的で未分化な姿勢的臓器的反射であって、それからしだいに、骨格筋による空間的運動をともなう定位的反射と、情動的反応とが分化するのだという。そして、前者の定位的反射が、物の世界にかかわる活動へ発展し、後者の情動的反応は、人の世界にかかわるのだという。

ピアジェの感覚→運動という活動、すなわち行為の図式とは、結局のところ前者の延長線上にしかなく、後者の、感覚→情動という面は、知性発達の全体系から捨象されてしまっている。当然、《操作的思考》の対象も、物理世界でしかない。他人へ《操作》を適用すれば、他人は意図せずして「他物化」されてしまうほかないのである。知的な世界認識からは——成人の日常的な世界観と自然科学的世界像とを問わず——他我は必然的に排除されてしまうのだ。

それゆえ、私たちのつぎの課題は、二重のものとなろう。「他我存在への信念の由来」を経験的に探求しつつも、知的な認識に由来する他我理解とそうでないものを可能な限り区別してゆくこと。思うに、知的な認識にとっての《私》も《他人》も、操作の対象であり、客観的空間のなかの《物》であり、類(クラス)を構成する要素のひとつであり、つまりは、無人称的な《ひと》となるほかないであろう。かくして《私の主観性》は私から追い出され、上空を飛行する「客観的認識」となるのである。そのような世界と自己との了解のうちに生きている私たちにとって、他者に自らの主観性を投入しつつも、それを私ではなく他人のものとして感じる、という過程のメカニズムは、たとえそれが論理的には不可能と見えたとしても、心理発達上はとりたてて難しいものではないだろう。すでに私のものという根源的な了解をうしなった、「だれのものでもない」主観性を、これまた、「誰でもない、ひと一般」である、私と他人に再配分するだけのことなのだから。

このような、いってみれば《知性のあざむきの網の目》をはぎ取ってはじめて、他我存在への真正の了解への道がひらかれるのではないだろうか。

参 考 文 献

- 1 Bergson, A.: Matière et mémoire. P.U.F., 1939.
- 2 波多野完治編『ピアジェの発達心理学』国土社, 1967。
- 3 Hume, D.: A Treatise of Human Nature. Oxford, 1888.
- 4 大森荘蔵:『物と心』岩波書店, 1976。
- 5 Piaget, J.: La naissance de l'intelligence chez l'enfant. Delachaux et Niestle, 1968 (『知能の誕生』谷村, 浜田訳, ミネルヴァ書房, 1979。)
- 6 Piaget, J.: La construction du réel chez l'enfant. Delachaux et Niestle, 1967.
- 7 Piaget, J.: La formation du symbole chez l'enfant. Delachaux et Nietle, 1978.
- 8 Piaget, J.: La psychologie de l' intelligence. Colin, 1967 (『知能の心理学』波多野, 滝沢訳, みすず書房, 1969。)
- 9 Russel, B.: Our Knowledge of the External World. Allen & Urwin, 1914.
- 10 Sartre, J.-P.: L' imaginaire. (『想像力の問題』人文書院)。
- 11 Wallon, A.: Les origines du caractere chez l'enfant. P.U.F., 1949 (『児童における性格の起源』久保田正人訳, 明治図書, 1965。)

(昭和63年4月8日受理)

(昭和63年9月10日発行)

